

【原 著】

地域社会とグローバルをつなぐ和楽器音楽
次世代育成の実践研究（１）
「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」外的評価の分析

早川 倫子 山路 みほ 高須 裕美 別府 祐子
樋口 亜希 中村 愛 清水 尚子 花草 容子
竹下 則子 三好 啓子 土佐 千紘

Practical Research on Nurturing the Next Generation of Classical Japanese Instrument Music
That Connects the Local and the Global Community (1)
Analysis of External Evaluations of the “Okayama International Classical Japanese Instruments Student Festival”

HAYAKAWA Rinko, YAMAJI Miho, TAKASU Hiromi, BEPPU Yuko,
HIGUCHI Aki, NAKAMURA Ai, SHIMIZU Naoko, HANAKUSA Yoko,
TAKESHITA Noriko, MIYOSHI Keiko, TOSA Chihiro

2025

岡山大学教師教育開発センター紀要 第15号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.15, March 2025

原 著

地域社会とグローバルをつなぐ和楽器音楽 次世代育成の実践研究(1) 「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」外的評価の分析

早川 倫子※1 山路 みほ※2 高須 裕美※1 別府 祐子※3
樋口 亜希※4 中村 愛※5 清水 尚子※5 花草 容子※6
竹下 則子※6 三好 啓子※7 土佐 千紘※7

本稿では、「和楽器音楽及び教育の拠点づくりの実践研究」の一環として開催した「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」の取り組みについて、その概要を報告するとともに、外的評価として「おかやま国際和楽器学生フェスティバルコンサート」終演後に実施した一般来場者対象の質問紙調査及びフェスティバルを参観した岡山県内の学校関係者対象の質問紙調査を取り上げ、意義と課題について検討した。

その結果、第一に音楽を通じた世代間や国際交流の喜びを感じ、和楽器の伝承と教育の重要性を強く意識する機会となったこと、第二に、和楽器が様々な国籍・年齢の学生に受容されていることを、来場者が客観視することで、自文化の価値の再認識につながったこと、第三に、フェスティバル全体としては、ワークショップが充実しており、様々な国籍・年齢の学生が同じステージで演奏する姿に対する評価が得られた点が明らかとなった。

キーワード：和楽器音楽，教育，次世代育成，グローバル，質問紙調査

- ※1 岡山大学学術研究院教育学域
- ※2 箏曲演奏家・岡山大学非常勤講師
- ※3 倉敷市立短期大学
- ※4 岡山県立岡山豊学校
- ※5 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程
- ※6 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科研究生
- ※7 岡山大学大学院教育学研究科修士課程

I はじめに

近年、我が国の邦楽人口は減少の一途を辿っている。コロナ禍以降、和楽器産業についても、高齢化も相まって廃業が増加するなど衰退の現状にある。和楽器文化を担う次世代育成は、多方で喫緊の課題となっている。

本研究の対象地域とする岡山県は、明治から昭和にかけて邦楽が盛んだったことで有名な県で、人間国宝の箏曲家、故初代米川文子氏(1894—1995)を輩出している。米川氏は、日本三曲協会会長、初代生田流協会会長等を務め、学校音楽での三曲の普及に尽力した人物でもある。現在でも、箏曲においては、箏曲三上社、啓楽箏曲むつみ会、中能島会岡山地区、宮城会岡山地区、岡山筑紫会、日本当道音楽会岡山支部、関西音楽指針会、箏道音楽院等、様々な流派の本部あるいは支部が置かれている。さらに、岡山邦楽合奏団や箏曲アカデミ

一岡山、そして個々の演奏家によっても、邦楽の閉鎖性を破り、現代における社会状況の中で新たな位置付けを行っていかうという努力がなされていることは、注目に値する。前述した我が国全体の邦楽人口の減少と和楽器産業の高齢化・衰退という状況も考えると、この貴重な伝統文化を地域社会の中で再生化し、将来に繋げていくことは急務であり、この岡山県での実践研究がその役割を担う可能性を秘めているのではないかと考えた。

教育現場では、平成 14 年度（2002 年）に改定・施行された「学習指導要領」において和楽器の実技指導が行われることになった。平成 29 年改定の現行の「学習指導要領」からは、和楽器を取り扱う学年が小学校第 3 学年及び第 4 学年からとなり、「グローバル化が進展するこれからの時代を生きていく児童にとって、早い時期から和楽器の直接体験を通して、我が国や郷土の音楽の良さを実感することは大きな意味がある」¹⁾と記されている。

しかし、和楽器の導入から 20 年以上経った今日でも邦楽人口は減少の一途をたどっている。和楽器音楽そのものについての研究論文は多くあるものの、学校教育における和楽器教育については、体験的な学習に関するもの（前田ら 2021, 瀧明 2018）が多い。権藤（2016）の研究は、伝統的な技の習得についての指導方法を学校教育の中に応用する具体的な方法について、一教師の指導方法の検討から論じており注目に値するものであるが、学校や地域を超えた伝承や普及に繋がる指導のあり方の研究は、あまり進んでいない現状がある。

一方、諸外国へ目を向けると、近年、尺八、箏、太鼓等の学習者が増加する傾向があり、新曲も次々に生み出されている。コロンビア大学、チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院、サンクトペテルブルグ音楽院、ハワイ大学、フィリピン大学、フランスジャンティイー市立音楽院等の教育機関では、和楽器を取り上げて研究や演奏が盛んに行われており、海外では確実に和楽器の普及が進んでいることが推察される。

このような背景をもとに、本研究では、これまでの日本の伝統的な和楽器の「伝承」という視点だけではなく、現在、海外で展開しつつある和楽器音楽の「普及」を踏まえ、地域社会とグローバルをつなぐ和楽器文化次世代育成を主眼として実践研究を進める必要があると考えた。岡山を拠点として、海外の大学で和楽器の研究や演奏を学んでいる学生たちを招聘し、岡山の子供たち、大学生および学校関係者との交流の場を作り、和楽器をプラットフォームとして岡山を異文化間対話の発信地として実践を行っていくのが本研究の目的である。

本稿では、研究の一環として 2024 年 8 月に初めて開催した「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」の取り組みについて報告する。また、「おかやま国際和楽器学生フェスティバルコンサート」終演後に実施した一般来場者対象の質問紙調査及びフェスティバルを参観した岡山県内の学校関係者対象の質問紙調査を取り上げ、和楽器音楽および教育の拠点づくりの視点から、その意義と課題について検討する。

Ⅱ 「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」の実践

１．概要

2024年8月1日～8月3日の日程で、第1回目となる「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」を岡山大学創立五十周年記念館で開催した（図1参照）。海外からは、シンガポール国立大学から講師1名と学生6名、フィリピン大学から講師1名と学生6名、フランスジャンティイー市立音楽院からは講師1名と学生4名、チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院からは学生1名（山路が指導）で、海外からは合わせて20名、岡山県内（岡山大学）の学生17名、岡山県内の小中学生約30名が参加した。また、企画運営を担う研究チームは10名、学生の運営スタッフとして岡山大学の学生23名、外部から3名がこの事業に携わった。フェスティバルの内容構成は、次の表1の通りである。



図1：「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」のチラシ

表1：「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」の日程と内容

8月1日（木）	国内外の学生を対象とした講習会《六段の調》 コンサートのための合同練習
8月2日（金）	和楽器学生コンクール（一般公開） コンサートのための合同練習 舞台練習・コンサートプロデュース講習会
8月3日（土）	岡山県の小中学生を対象とした箏のワークショップ フェスティバルコンサート（一般公開）

２．実施経緯

本フェスティバル開催にあたっては、早川と山路で約3年前から海外の教育機関への交渉を開始した。協力体制の構築にあたっては、流派等を超えた形での実施を目指し、各流派ではなく教育機関で和楽器の指導を行っている講師へ依頼を行ってきた。また、助成金として以下の表2における4件が採択された。

表2：採択された助成金等

公益財団法人 両備裡園記念財団「文化・芸術・教育に関わる研究」
公益財団法人 三井住友海上文化財団「文化の国際交流活動に対する助成」
公益財団法人 福武教育文化振興財団「教育文化活動助成」
岡山県民文化祭「文化パワーアップ・アクション助成事業」

3. フェスティバルの実際の様子

以下の写真は、フェスティバル3日間の実際の様子である。

1日目は、岡山大学創立五十周年記念館のホワイエで開会式の後、《六段の調》の講習会とコンサートのための合同練習でスタートした。2日目午前の和楽器学生コンクールでは、個人の部において箏は10名、三絃3名、アンサンブルの部4組がエントリーし、個人の部は課題曲（箏は《六段の調》、三絃は《鶴の声》）を、アンサンブルの部は自由曲を披露した。賞としては、「岡山大学教育賞」（総合的に優秀な演奏、コンサートでの受賞者記念演奏に出演）、「邦楽ジャーナル賞」（楽曲の理解が深い演奏）、「紫幹翠葉（しかんすいよう）賞」（音楽表現が豊かな演奏）が選ばれた個人・団体に授与された。

3日目は、午前中に小中学生を対象とした「箏のワークショップ」を実施した。事前に申し込みのあった小中学生が参加し、箏曲の専門家から2時間の指導を受け、午後のコンサートに臨んだ。ワークショップでは、箏の基本的な奏法を学ぶ内容と、イメージを喚起し即興的な表現を行う内容の2部で構成され、ワークショップ中には、側で国内外の学生らが子供たちをサポートした。午後のコンサートは、3日間のフェスティバルのメインイベント（一般公開）として開催し、小中学生と国内外の学生との共演、合同チームによる演奏、講師演奏等があり、途中には、小中学生から海外の学習者へ質問をして交流する「学生と子供たちによる国際フォーラム」を実施した。



開会式



《六段の調》講習会



合同練習の様子



コンクール表彰式



小中学生のワークショップ



フェスティバルコンサート本番



出演者集合写真

Ⅲ「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」に対する外的評価

1. 一般来場者を対象とした質問紙調査

(1) 概要

質問紙調査は、「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」参加の国内外の学生、講師、小中学生、フェスティバル参観の岡山県内の学校関係者、「フェスティバルコンサート」の一般来場者（136名）を対象に実施している。

ここでは、「フェスティバルコンサート」終演後に実施した一般来場者を対象に実施した質問紙調査について取り上げる。一般来場者を対象にした設問項目は以下の表3の通りである。なお、調査にあたっては質問紙調査用紙に研究の一環として実施する旨を記載し、回答は任意であること、回答することで調査への参加へ同意したこととする説明文を記載して回収した。氏名等の個人情報収集していない。回答者数は、77人であった。

表3：一般来場者を対象にした設問項目

1. 該当する年代に○に囲んで下さい 10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代以上
2. 本日のイベントをどこで知りましたか
3. 本日のイベントに参加しようと思ったきっかけは何ですか
4. お箏を実際に演奏した経験はありますか 「ある」・「ない」
5. 「ある」と答えた方はどのような機会に触れたことがありますか
6. 本日、外国の方が和楽器に触れている姿を見てどのように感じましたか その理由も記述してください
7. 本日のイベントで日本の子供たちが和楽器に触れている姿を見てどのように感じましたか その理由も記述してください
8. 和楽器に対して持っている印象に近いものに○をつけてください 発展していつているもの、身近なもの、親しみやすいもの、非日常のもの、 敷居がたかいもの、馴染みがないもの、その他（ ）
9. 伝統文化が存続していくために、どのようなことが必要だと思いますか
10. 今回のイベントを通してお箏をしてみたいと思いましたか
11. このようなイベントが今後も開催された場合参加したいと思いますか
12. 今回のイベントの感想を自由に記述してください

(2) 分析結果

分析にあたっては、各設問内容及び回答形式に合わせて、基礎統計量の分析、KH Coder 3によるテキストマイニングの手法²⁾を用いた。

①回答者の年代と箏（和楽器）経験の有無について

回答者77名のうち、年代は、表4の通りで、幅広い世代の人々が本イベントへ来場していることがわかる。一方で、学生フェスティバルにも関わらず、特に、70代以上が一番多く、また50代～70代が半数以上を占めていることから、「和楽器」について興味のある年齢層が高いことを示していると言えよう。

また、表5に示した通り、箏の経験の有無については43人（55.8%）の人が「ある」と回答している。半数以上が経験しているが、その機会は「学校」の割合が一番多く48.6%（21人）、次いで「習い事」30.2%（13人）であった。

経験ありと回答した年代別の人数については、表 6 の通りで、特に年代による有意な差は認められなかった。

②和楽器に対する印象について

以下の図 2 で示したように、「和楽器に対して持っている印象」（複数回答可）については、「非日常のもの」と答えた人が 29 人（43.3%）と半数近く、続いて「馴染みがないもの」24 人（35.8%）、「敷居が高くないもの」22 人（32.8%）となっている。一方で、「身近なもの」15 人（22.4%）、「親しみやすいもの」14 人（20.9%）となっている。年代については「身近なもの」と回答したのは 10 代（5 人）が最も多く、「親しみやすい」と回答したのは 50 代（6 人）が最も多い結果となっているが、ここでも年代による有意な差は認められなかった。その他、「発展していつているもの」という回答も 13 人（19.4%）あり、今回のフェスティバルがそうした印象を喚起した可能性も窺える。

表 4：回答者の年代

年代	人数	割合
10 代未満	1 人	1.3%
10 代	9 人	11.7%
20 代	12 人	15.6%
30 代	6 人	7.8%
40 代	10 人	13.0%
50 代	15 人	19.5%
60 代	8 人	10.4%
70 代以上	17 人	22.1%

注）N=77

表 5：箏の経験者の割合

ある	なし
43 人	34 人
55.8%	44.2%

注）N=77

表 6：箏の経験の年代別有無

	経験有り	経験無し
10 代未満	1 人	1 人
10 代	6 人	3 人
20 代	7 人	4 人
30 代	3 人	3 人
40 代	6 人	5 人
50 代	9 人	6 人
60 代	4 人	2 人
70 代以上	7 人	10 人

注）N=77

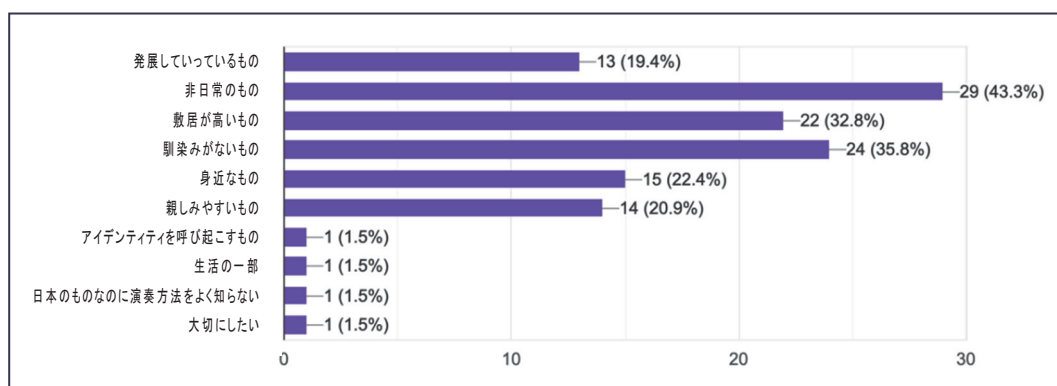


図 2：和楽器に対する印象について 注）N=77

③海外学習者の和楽器の取り組みについて

設問 6 では、海外学習者の和楽器の取り組みについて、その印象を尋ねた。自由記述に見られる頻出語については、サンプル数 67、文の数 122、分析対象の抽出語の総数 1726、異なる語の数 338 であった。また「海外学習者の和楽器の取り組みについて」の印象に見られる頻出語の上位 10 件は、表 7 の通りである。図 3 は「海外学習者の和楽器の取り組みについて」の印象に関する頻出語

の関連性を、共起ネットワーク図で示したものである。共起ネットワーク図は、10のサブグラフで構成された。

図3のSubgraph 1は、海外の学生らが、和楽器に真摯に向き合い演奏していたことに対して「感動」や「驚き」を示すもの、Subgraph 2は、海外の学生が、日本文化に興味をもっていることに対しての評価を示すもの、Subgraph 3は、コンサートで実際に出演者が演奏する姿を見たことで異文化交流・国際交流のあり方について述べられたもの、Subgraph 4は、日本人でも馴染みがない和楽器の価値を理解していることや、受容していることに対して、日本人として「嬉しい」という肯定的感情を示すもの、と解釈できる。また、Subgraph 10は、演奏や表現そのものに対する評価と解釈される。これらから、今回のフェスティバルが一般来場者にも良い刺激を与えた、意義のあるものであったと考えられる。記述には、海外の学生らが演奏する姿勢から和楽器文化の奥深さを理解し、和楽器への真摯な向き合い方に感銘を受ける様子がさまざまな言葉によって述べられている。しかしながら、カテゴリ同士がそれぞれ独立しており、共起関係は見られない。このことから、一般来場者はコンサート聴取者として、海外の学生が和楽器文化に触れることについて、あらゆる考えを巡らせていたのではないかと推察される。

表7：海外学習者の和楽器の取り組みについて

抽出語	出現回数
思う	36
和楽	25
日本	24
演奏	20
感じる	20
外国	16
日本人	16
嬉しい	14
文化	14
感動	11
素晴らしい	11

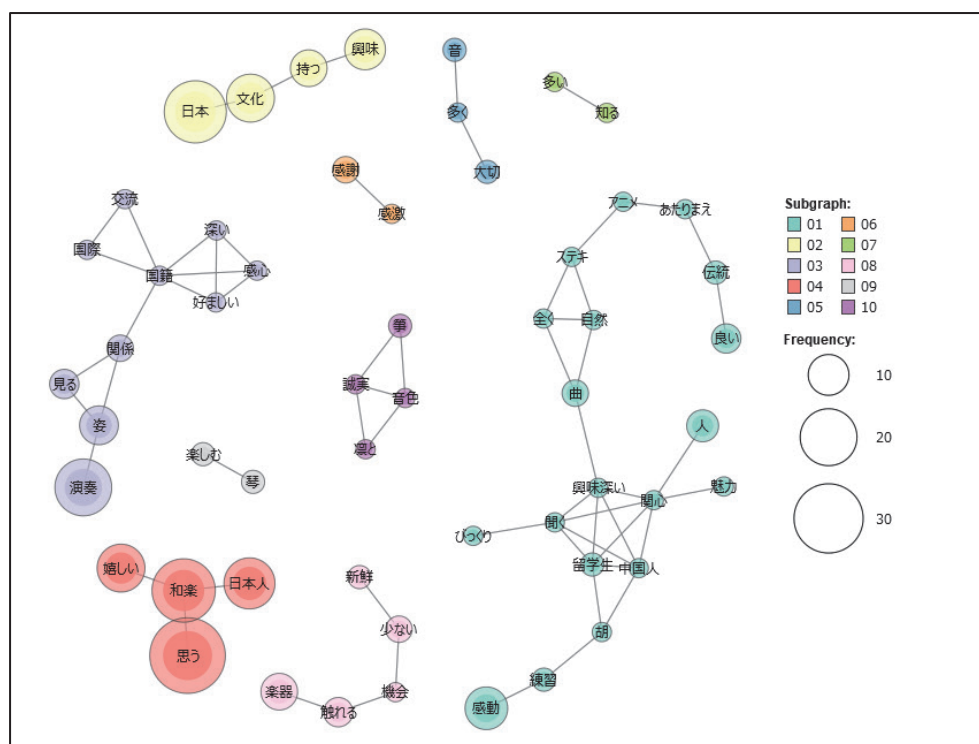


図3：海外学習者の和楽器の取り組みについて

④和楽器に触れる子供たちの姿について

設問 7 では、子供たちの和楽器に触れる姿について、その印象を尋ねた。

自由記述に見られる頻出語については、サンプル数 54、文の数 102、分析対象の抽出語の総数 1468、異なる語の数 358 であった。また「和楽器に触れる子供たちの姿について」の印象に見られる頻出語の上位 10 件は、表 8 の通りである。図 4 は「和楽器に触れる子供たちの姿について」の印象に関する頻出語の関連性を共起ネットワーク図で示したものである。7 つのサブグラフで構成された。

表 8：和楽器に触れる子供たちの姿について

抽出語	出現回数
思う	31
和楽	20
触れる	14
演奏	11
子供	10
機会	9
感じる	8
興味	8
姿	8
嬉しい	7
持つ	7
伝統	7

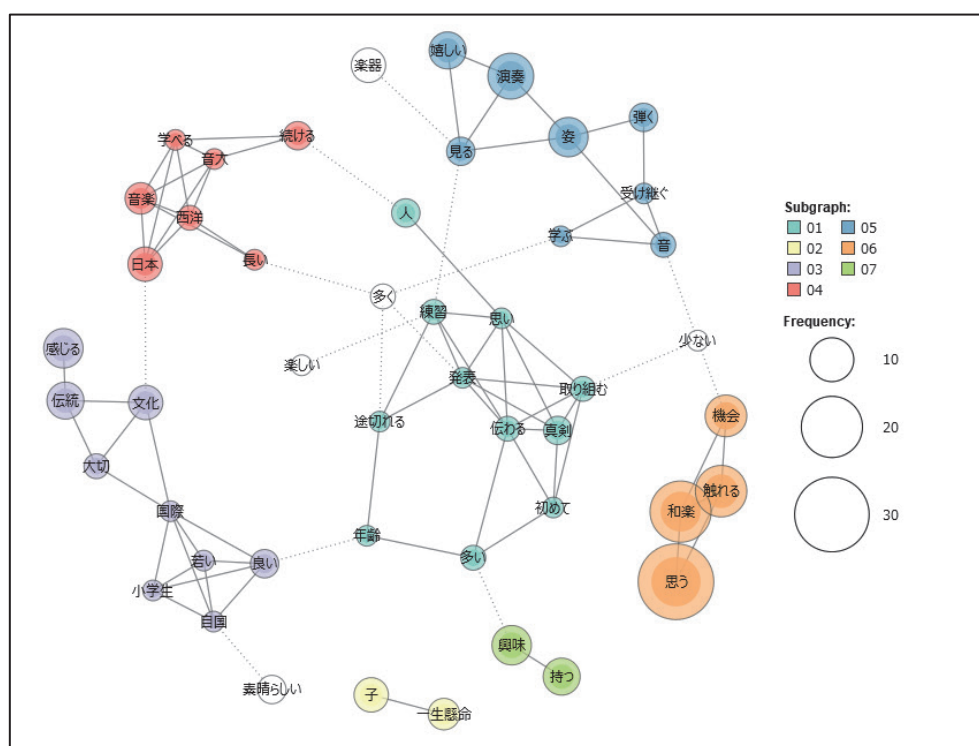


図 4：和楽器に触れる子供たちの姿について

表 8 及び図 4 からは、一般来場者らが、子供たちが和楽器を学び演奏する姿を見ることによって、単に音楽を奏でる舞台を鑑賞するだけでなく、伝統文化の深い理解や技術の継承にも繋がる未来を見通して観察していたことが窺える。Subgraph 5 に見られる「受け継ぐ」という言葉は、子供を対象とした質問項目から特に出現回数が多く、次世代に文化を伝えていくキーワードとして、その意義を示している。「学ぶ」「音」「弾く」という単語の繋がりから、学ぶことに加えて、音に触れ、さらに弾くことの重要性が複数述べられていることが示された。さらに、文化や伝統、国際活動に若い世代が触れることが大切であるという記述も一群として浮上している。国際的な視点は、自国の文化に対す

る理解を深めるだけでなく、他文化との交流を通じて広い視野を持つことを可能にすると考えられる。したがって、和楽器に触れる機会は、文化体験を促進する重要な要素になると認識されたことが推察された。

これらの記述から、今回のフェスティバルは、単なる技術的な試みを超えている印象を与えたことが読み取れる。演奏者である学生や子供たち、それを鑑賞する一般来場者も含めた、文化の「伝わる」場として機能していたことが示されている。

⑤伝統文化の存続に必要なことについて

設問9では、伝統文化の存続に必要なことについて、考えを尋ねた。自由記述に見られる頻出語については、サンプル数56、文の数84、分析対象の抽出語の総数1526、異なる語の数402であった。また「伝統文化の存続に必要なことについて」に見られる頻出語の上位10件は、表9の通りである。図5は「伝統文化の存続に必要なことについて」に関する頻出語の関連性を共起ネットワーク図で示したものである。共起ネットワーク図は、6つのサブグラフで構成された。

表9：伝統文化の存続に必要なことについて

抽出語	出現回数
思う	24
機会	23
学校	15
触れる	15
和楽	12
人	11
演奏	10
教育	10
増える	10
子供	9

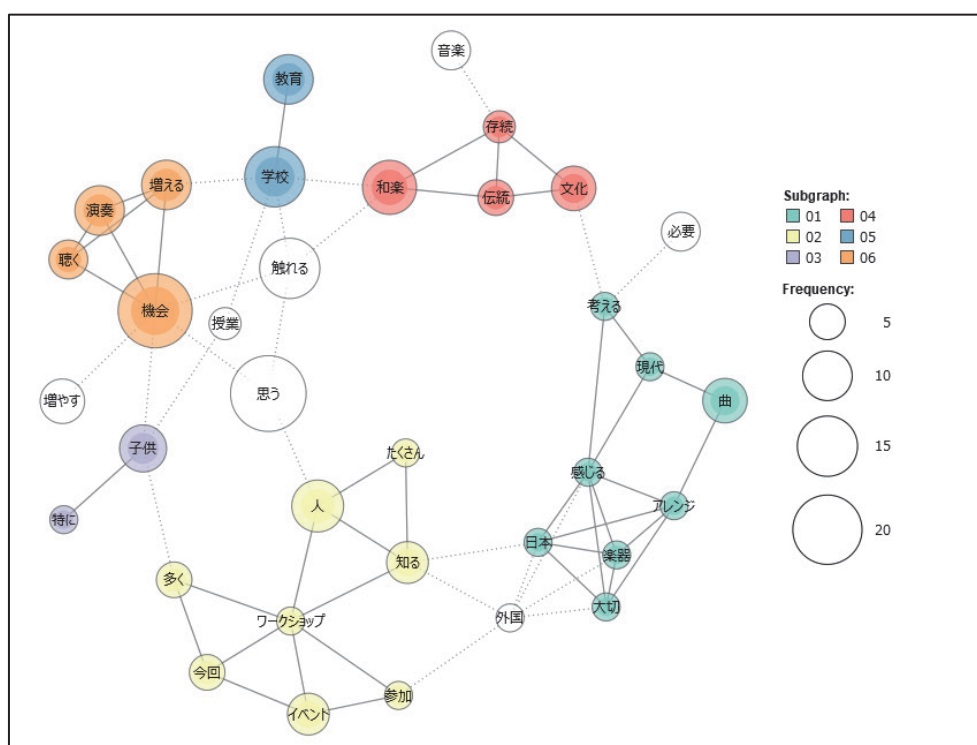


図5：伝統文化の存続に必要なことについて

表 9 及び図 5 からは、一般来場者が、伝統文化の存続と継承には、Subgraph 6 に示されているように、学ぶ機会が不可欠であろうことが複数述べられていることが読み取れる。特にワークショップなどを含む「演奏を見たり聴いたりする実践的な学びの場」が増えることは、子供たちにとって非常に重要なであることが認識されている（Subgraph 2）。

また、親や教育機関の取り組みは、子供たちの伝統文化を学ぶ機会を支えるものである（Subgraph 5）。学校教育においては、伝統文化に対する敷居を下げ、より多くの生徒が興味を持てるようなカリキュラムが期待されていることが述べられた。多様な文化が混在する現代において、伝統文化を身近に感じられる環境を整えていくことが、今後求められている課題の一つであると言える。

第二に、伝統文化の可能性についてである。特に 70 代以上の世代の来場者においては、存続や継承に固執する必要はないと述べられている記述が見られた。和楽器に特有の固定観念にとらわれず、柔軟にアプローチすることが意見されていた。この点において、40 代の参加者も同様に、伝統の枠に縛られず、現代的な解釈を取り入れることが重要であることを述べていた。加えて、伝統の存続の難しさを認識している記述もある。さらに、20 代の参加者は、古典音楽の魅力を認識しつつも、伝統を身近に感じるためには敷居を下げる必要があると主張している。Subgraph 1 からわかるように、現代曲の取り扱いや、さまざまなアプローチを取り入れることで、より多くの人々が伝統文化に親しみやすくなるのではないかという提案が述べられていた。

⑥本イベントについての感想

設問 12 では、本イベントの感想を尋ねた。

自由記述に見られる頻出語については、サンプル数 50、文の数 111、分析対象の抽出語の総数 1662、異なる語の数 445 であった。「本イベントの感想」に見られる頻出語の上位 10 件は、表 10 の通りである。図 6 は「本イベントについての感想」に関する頻出語の関連性を共起ネットワーク図で示したものである。共起ネットワーク図は 5 つのサブグラフで構成された。

約 50 面に及ぶ和楽器合奏の音色の迫力や、プロフェッショナルではない各国の学生が和楽器に一心に取り組む姿に対して、「素敵」「素晴らしい」「感動」といった言葉で表現されている（Subgraph 4）ことから、心動かされた意見が多数得られたことが分かる。「子供」「娘」「就学」「機会」「経験」「ワークショップ」といった単語も頻出しており、子供をもつ親からの回答が多かったことが見受けられる。親子でこのような機会に参加し、和楽器に触れ考える貴重な機会となったことが推察される。さらに、フェスティバルの「講師」「学生」「先生」などに向けた労いや、今後のイベントへの期待が多数記されたことから（Subgraph 1，4），企画の意義が前向きに評価されたと捉えられた。

表 10：本イベントの感想について

抽出語	出現回数
演奏	20
思う	19
ありがとう	12
イベント	10
素晴らしい	10
和楽	7
音色	6
感動	6
子供	6
時間	6

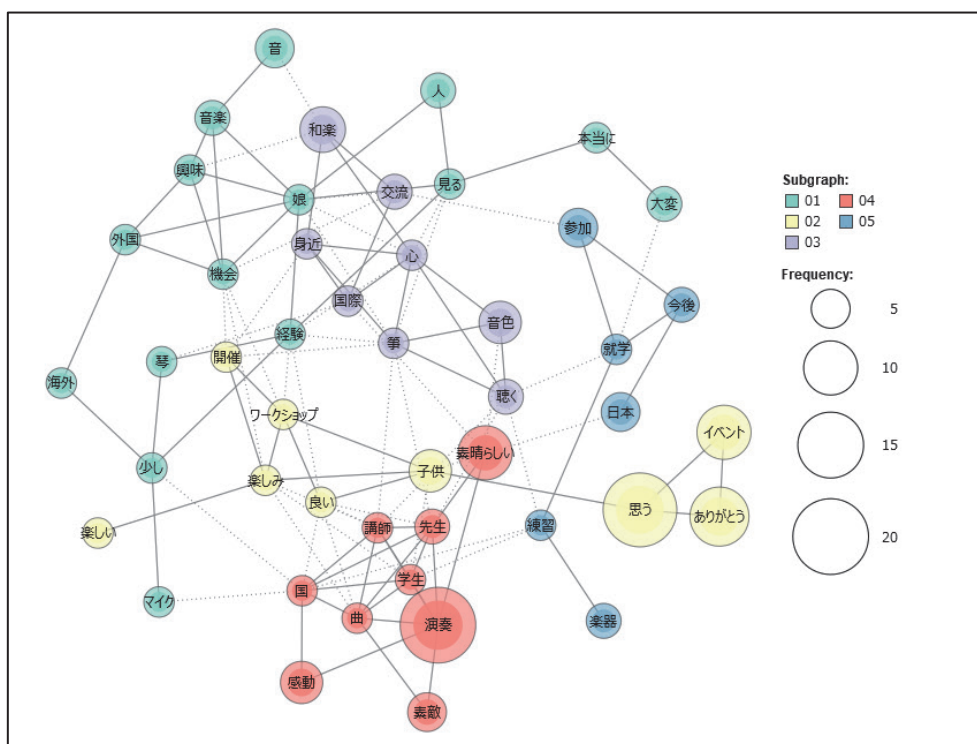


図6：本イベントについての感想

2. 岡山県の学校関係者対象の質問紙調査

(1) 概要

ここでは、3日間の間にフェスティバルの見学に来場した岡山県の学校関係者を対象とした質問紙調査について取り上げる。岡山県の学校関係者を対象にした設問項目のうち、ここでは特に設問 10～13 (表 11) の自由記述を取り上げ、記述内容の特徴を抽出する。回答者数は、15 人であった。

表 11：岡山県の学校関係者を対象にした設問項目 10～13

10: 今回のイベントを通して、和楽器の指導に対する印象について変わったことがあればお書きください

11: 今後の和楽器教育の拠点づくりにおいて、求めるものはなんですか〔どんな機会が欲しいか、どんなイベントがあれば参加してみたいか、等〕

12: イベントを通して取り入れてみたいと思った指導法・アイデア等あればお書きください

13: 今回のイベントを通して印象に残ったこと・感想をお書きください

(2) 分析結果

表 11 の設問項目における自由記述を分析した結果、記述内容の特徴（傾向）については、以下表 12 の 6 点にまとめることができた。なお、表 12 右列においては、各項目に該当する自由記述を抜粋して掲載している。

表 12: 記述内容の特徴

①国際交流の意義	・海外の方が、和楽器を学んで下さっていることに驚き、嬉しかったです。海外の子の日本の音楽に対する感じ方に大変興味を持ちました。音による国際交流、とても有意義な会でした（Q13） ・様々な年齢・国籍の方々が同じステージで和楽器を奏でる姿がとても素敵で嬉しかったです（Q12） ・海外の方もお琴が好きなんだと感じ、積極的に誘って一緒に演奏する機会を作りたい（Q10） ・同じ箏でも海外の方が弾いている姿は、とてもドラマチックで文化の違いを感じることができました（Q10）
②教育現場での和楽器活動	・小中学校での授業に即興的に打爪や、流し爪等の技法を取り入れてみたいと思いました（Q12） ・授業でDVDを何回も見ると、本物の良い物を生で聴ける機会を作ってあげてほしいと願います！（Q12） ・専門科による演奏や、音の捉え方などを含めた指導を学校にどんどん入れて頂きたい（Q11） ・生徒が和楽器体験に価値を感じるような機会・イベント。和楽器学習者・専門家が学校にきて中学生と一緒に演奏するようなプログラム（Q11） ・親しみやすい楽曲であること、響きが心地よいこと、外国の人にも人気であることなどを伝えていきたい（Q10）
③合奏の価値	・箏を使って合奏するというのが、箏を少し身近に感じるきっかけになったと思う（Q13） ・今回のようなワークショップの機会があればありがたいです。そしてそれをステージでたくさんの音に包まれて自分もその一員として発表したという喜びを味わえることは素晴らしいことだと思います（Q11） ・心を合わせ合奏することの喜びや面白さが伝わってきました（Q10）
④日本人と伝統音楽	・和楽器の伝統を引き継いでいくべき私たち日本人の意識改革の一助にもなったと思います（Q13） ・親しみやすい楽曲であること、響きが心地よいこと、外国の人にも人気であることなどを伝えていきたい。伝統を守っていくことの大切さを再確認しました（Q10）
⑤幼少期の音楽体験	・子供の頃から、和楽器演奏に触れることの大切さを実感しました（Q13） ・普段の生活の中であまり聞くことのない和楽器の響きを体全体で感じることができる、このような機会を幼年期にたくさんさせてあげたいと改めて思いました（Q10）
⑥和楽器の音やその特徴	・心洗われる音、音楽でした（Q13） ・木のホールに響く和の響き（Q12） ・澄んだ音や音の濁りの良さ（Q10） ・響きが心地よい（Q10） ・和楽器の珍しさや音声の良さが手伝っていると思います。視聴する側への可能性を考えて、福祉にも取り入れていただければ有難いです（Q10）

①の国際交流の意義については、学校関係者らは、異なる国籍や文化の背景を持つ学生が和楽器という共通の音楽、伝統芸能を通して繋がっていることに感動を覚えており、その意義を感じていることが分かる。さらに、国際交流への興味が「一緒に演奏する機会を作りたい」という前向きな行動意欲に繋がっている。このような反応から、このフェスティバルが単なる鑑賞体験以上に、参加者（一般来場者も含め）の中で、国を超えた文化的なつながりや共に学ぶことの意義を感じさせ、国際交流に対する意識を高めたのではないかと考える。

②の教育現場での和楽器活動についての意見群からは、教育現場で和楽器を取り入れることへの関心が強く現れている。特に、学校関係者らが「本物の音楽体験」を生徒に提供したいと感じていることが特徴である。また、「即興的な技法」や「親しみやすい楽曲」を活用することなど具体的な活動内容も挙げられていることから、このフェスティバルが今後の教育の実践に影響を与えることも考えられる。

③の合奏の価値についての意見群からは、ステージでの合奏やパフォーマンスが、音楽の魅力や充実感を深く体験できる大切な機会であると認識したことが伝わってくる。また、「箏を少し身近に感じるきっかけ」「合奏することの喜び」という言葉から、和楽器への理解や関心が深まり、音楽教育における合奏の価値を見出すことができたと考える。

④については、日本人が伝統音楽とどう向き合うかについての内省的な視点が反映された意見があった。この意見群からは、「伝統を守っていくことの大切さ」を再認識することが、日本の伝統文化の継承や発信に繋がると感じていることが分かる。また、海外の人々からの興味や評価を通じて日本の伝統文化に新たな価値を見出し、親しみやすい楽曲や心地の良い響きといった和楽器の魅力を変えて伝えたいという意見も見られた。

⑤の幼少期の音楽体験の意見群からは、幼少期に和楽器などの伝統音楽に触れる機会が重要であると感じていることが分かる。フェスティバルが教育の早期段階での音楽体験の意義を再認識させるきっかけとなっていると考えられる。日常生活ではあまり触れる機会のない和楽器を、子どもの頃に体験できる機会の必要性として示されている。

⑥和楽器の音やその特徴については、和楽器特有の「心洗われる音」や「澄んだ音」、また「音の濁り」など、和楽器ならではの音が深い印象を与えたことが分かる。特に、木造のホールとの相乗効果で生まれる「和の響き」が、空間全体を包み込み、聴覚だけでなく心にも豊かな影響があると感じているようである。他に、「福祉でも取り入れてほしい」という意見もあった。和楽器の音色や響きから、試聴体験や演奏体験が医療や福祉分野で活用されることを期待していることが分かる。

IV 総合考察

本稿では、「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」の取り組みについて報告し、一般来場者対象の質問紙調査及び岡山県内の学校関係者対象の質問紙調査の分析を行い、和楽器音楽および教育の拠点づくりの視点から、その意義と課題について考察をおこなってきた。

意義については、次の3点に整理される。第一に、コンサート参加者は音楽を通じた世代間や国際交流の喜びを感じ、和楽器の伝承と教育の重要性を強く意識する機会となった。第二に、和楽器が様々な国籍・年齢の学生に受容されていることを、（日本人でありながら）来場者として客観視することで、自文化の価値の再認識につながった。それにより、文化の存続と継承について考える機会を提供する場となったことに、拠点づくりとしての取り組みの意義がある。第三に、フェスティバル全体としては、ワークショップが充実しており、様々な国籍・年齢の学生が同じステージで演奏する姿に対する評価が得られた。

今後の課題としては、和楽器教育の拠点づくりに向けて、専門的な指導を学校教員向けに充実させること、地域における和楽器の体験イベントを増強し、学校と地域が連携した和楽器文化及び教育の次世代育成を意識していくことが

求められるだろう。今回の一般来場者が、前述の通り 50 代から 70 代以上が半数以上を占めており、若い世代の興味関心の対象としての和楽器文化のあり方を考える必要性も認められた。

参考・引用文献

- ・権藤敦子(2016)「高等学校における和楽器の学習への取り組み―原一十代教諭の『和楽器の魅力～技と美意識～』の授業から―」, 日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』14 巻, pp.109-118
- ・前田則子・磯田由香・林美音子(2021)「大学及び附属小学校における和楽器学習の実践―箏に触れ合おう実践報告 2―」奈良教育大学『次世代教員養成センター紀要』第 7 号, pp.197-202
- ・文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 音楽編』
- ・瀧明知恵子(2018)「小学校音楽科の伝統文化尊重における一考察～和楽器伝承における視点から～」, 『奈良学園大学紀要』9 号, pp.99-109

註

- 1) 文部科学省, 平成 29 年改定の小・中学校学習指導要領に関する Q&A〈音楽に関すること〉
- 2) 本稿で使用した KH Coder 3 は, 樋口耕一が開発したテキストマイニング用フリーソフトウェア (<https://kncoder.net/>) である。

付記

本稿は, 一部公益財団法人両備檉園記念財団の報告書を加筆修正している。

謝辞

本研究は, 公益財団法人両備檉園記念財団, 三井住友海上文化財団, 福武教育文化振興財団の助成, おかやま県民文化祭の補助金を受けています。また, 一般社団法人全国邦楽器連合会のご協力をいただいております。

本実践研究推進にあたって, フィリピン大学永井博子氏, シンガポール国立大学北井佐枝子氏, ジャンティイー市立音楽院みやざきみえこ氏のご協力に御礼申し上げます。

Practical research on nurturing the next generation of Classical Japanese instrument music that connects the local and the global community (1)
Analysis of external evaluations of the “Okayama International Classical Japanese Instruments Student Festival”

HAYAKAWA Rinko*1, YAMAJI Miho*2, TAKASU Hiromi*1, BEPPU Yuko*3, HIGUCHI Aki*4, NAKAMURA Ai*5, SHIMIZU Naoko*5, HANAKUSA Yoko*6, TAKESHITA Noriko*6, MIYOSHI Keiko*7, TOSA Chihiro*7

Keywords :Classical Japanese instrument, education, nurturing the next generation, glocal, questionnaire survey

*1 Okayama University

*2 Koto Player

*3 Kurashiki City College

*4 Okayama Prefectural School for the Deaf

*5 Doctoral Student at the Joint Graduate School in Science of School Education
Hyogo University of Teacher Education

*6 Research Student at the Joint Graduate School in Science of School Education
Hyogo University of Teacher Education

*7 Master's Student at the Graduate School of Education in Okayama University
